

小説文の統合性

——『雁』をめぐって——

吉 田 廣

わたしは、これまでに、詩文や報道文や小説文の分析を手がけてきた。諸種の言説をできるだけ精密に解剖することによって、自分なりの文体論を築き上げようとしたのである。けれども、このごろは、一篇の小説を一つの世界として成り立たせるために、語り手がどういった工夫をしているのかを見定めたいとの欲求を抱くようになってきた。はたして、わたしたちが何篇かの小説を過去に読んだ場合、いま振り返ってみれば、個々の小説が個性的な存在として脳裡に蘇る。その場合には、具体的な大小の表現がそういうものとして思い出されることもあるだろうが、むしろ、登場人物像や場面やストーリー展開などが胸中に湧き起こるのではないか。また、わたしたちが小説を読んでいるさなかにあっても、これらの要素が相まってその作品を統合し、そうすることでその独自の世界をわたしたちの脳裡に焼きつけるのではないか。そうした統合要素を本論でいささかなりとも解き明かしてみたい。

ところで、同じ小説であっても、わたしたちが時を経て再読したり、三読したりするたびごとに、新鮮な驚きをもたらす場合が少なくない。森鷗外の代表作『雁』（1915年完結）をわたしはこれまでに三回読んだ。そして、このたび四回目に読んでみて、これまではあっさり読み過ぎていた一つの箇所にも最も惹きつけられた。因みに、底本は平成20年10月5日111刷の新潮文庫版である。また、煩雑になるのでルビはすべて省略する（以下同様）。

僕と岡田とは、その晩石原の所に夜の更けるまでいた。雁を肴に酒を飲む石原の相伴をしたと云っても好い。岡田が洋行の事を噫気にも出さぬので、僕は色々話したい事のあるのをこらえて、石原と岡田との間に交換せられる競漕の経歴談などに耳を傾けていた。

上条へ帰った時は、僕は草臥と酒の酔とのために、岡田と話すことも出

来ずに、別れて寝た。翌日大学から帰って見ればもう岡田はいなかった。

（143頁1行目～6行目）

この文章のなかの「石原」は、「岡田」と「僕」と同じく、医科大学に通う学生である。「洋行の事」とは、「岡田」が、東洋の風土病を研究しにきたドイツ人の教授についてドイツに留学することになり、下宿屋から翌日にも転居することを意味する。「競漕」とは「岡田」が競漕部に所属していたことを指す。「上条」は「岡田」や「僕」が賄いつきで寝泊りしている下宿屋である。なお「岡田」と「僕」はこの下宿屋で壁隣の関係にある。

なぜこの断章がわたしの注意を惹いたかという、それにはいくつかの理由がある。テキスト内的理由としては、「僕」が「岡田」と「色々話したい」にも関わらず、ついにそれを果たせなかったことが挙げられる。「石原」のところでも、帰宅途上でも、「僕」はじつくりと「岡田」の話を読めなかったし、「翌日大学から帰って見ればもう岡田はいなかった」のである。壁隣の「岡田」が決定的に立ち去ったことを発見したときの「僕」の驚きや空しさは、察するに余りある。ここには対照法が脈打っている。「大学」から「上条」に帰って「岡田」の話を読こうと願う「僕」と、「岡田」がすでに立ち去ってしまったのを目撃して落胆する「僕」とのあいだに成立するコントラストがそれである。物語の隅ずみにまでドラマチック性を持たせて、読者の眼を釘づけにしておこうとする語り手の目論見が垣間見られる。

このテキストを印象深いものに行っている技法として、対照法と並んで指摘しておかねばならないのは反復法である。「僕」が「岡田」の洋行について詳しく訊きたいとの思いを募らせているのに、それを邪魔立てする三つの要素が次々に現れる。「石原」、「草臥と酒の酔」、「大学」である。これらの障害のために、ついに「僕」は「岡田」の話を読み損なってしまう。物見高い「僕」と恬然とした質の「岡田」とが対照をなして、その対照が三項にわたって描き出されている。だから、この断章では、文体論的に言って、対照法と反復法とが緊密に併用されていると結論づけられる。言い換えれば、これらの二つの修辞技法が効果的に相まって、本断章の統合性を醸し出している。このことがわたしの注意を強く惹いたのは間違いない。

テキスト外的理由としては、まず「雁」のことが取り上げられよう。本断章の最初の段落と同じ日の夕刻に、「岡田」が投げた石によって首を折られた水鳥である。

「あれまで石が届くか」と、石原が岡田の顔を見て云った。

「届くことは届くが、中るか中らぬかが疑問だ」と、岡田は答えた。

「遣って見給え」

岡田は躊躇した。「あれはもう寐るのだろう。石を投げ附けるのは可哀そうだ」

石原は笑った。「そう物の哀を知り過ぎては困るなあ。君が投げんと云うなら、僕が投げる」

岡田は不精らしく石を拾った。「そんなら僕が逃がして遣る」つぶてはひゅうと云う微かな響をさせて飛んだ。僕がその行方をじっと見ていると、一羽の雁が擡げていた頸をぐたりと垂れた。それと同時に二三羽の雁が鳴きつつ羽たたきをして、水面を滑って散った。しかし飛び起ちはしなかった。頸を垂れた雁は動かずに故の所にいる。

（132頁12行目～133頁5行目）

ここまで読み進めてきた読者は、はじめて『雁』というタイトルの由来を知ることになる。そして、「頸をぐたりと垂れた」雁のイメージを、「お玉」もしくは「彼女の悲恋」のそれと心中で重ね合わせる。「お玉」は「高利貸」を営む「末造」の妾であるが、ここ数か月来というものの、家の前を通る「岡田」に恋慕の情を募らせている。

「なんだって円錐の立方積なんぞを計算し出したのだ」と、僕は石原に言ったが、それと同時に僕の目は坂の中段に立って、こっちを見ている女の姿を認めて、僕の心は一種異様な激動を感じた。僕は池の北の端から引き返す途すがら、交番の巡査の事を思うよりは、この女の事を思っていた。なぜだか知らぬが、僕にはこの女が岡田を待ち受けていそうに思われたのである。果して僕の想像は僕を欺かなかった。女は自分の家よりは二三軒先へ出迎えていた。

僕は石原の目を掠めるように、女の顔と岡田の顔とを見較べた。いつも

薄紅に勻っている岡田の顔は、確に一入赤く染まった。そして彼は偶然帽を動かすらしく装って、帽の底に手を掛けた。女の顔は石のように凝っていた。そして美しく睜った目の底には、無限の残惜しさが含まれているようであった。

（141 頁 8 行目～142 頁 1 行目）

このような象徴性もしくは比喩性は、小説文においてよく見かけられるものである。この箇所の字句を追えば、「女」の「無限の残惜しさ」に寄り添うようにして、「頸をぐたりと垂れた」雁のイメージが髣髴とわたしたち読者の胸中に宿る。さらに、頸を折られた雁はいままさに「岡田」の外套のしたに隠されている。だから、単に象徴性を云々する以外にも、「女」と「雁」との即物的な距離がきわめて近いということに注目すべきである。「生なましい象徴性」とでも言えば正鵠を得られよう。いずれにしても、こうした事情もまた、小説『雁』の言説の統合性を高めている。

次に「岡田」の「洋行の事」に着目しよう。「岡田」は、転居の前日の夕刻に蕎麦屋で「僕」に次のような言葉を漏らす。

「折角今まで遣って来て、卒業しないのは残念だが、所詮官費留学生になれない僕がこの機会を失すると、ヨオロッパが見られないからね」

（136 頁 8 行目～136 頁 10 行目）

ここで、注意深い読者であれば、この小説の冒頭近くに「岡田」の性行を表す次の片言隻語があったのを思い起こすはずである。

学期毎に試験の点数を争って、特待生を狙う勉強家ではない。遣るだけの事をちゃんと遣って、級の中位より下には下らずに進んで来た。

（6 頁 13 行目～15 行目）

岡田がいかにか君子であるかを説明する一齣のなかの言葉である。この二つの引用文の関係は伏線のそれである。「岡田」の「所詮官費留学生になれない」理由が実に 130 頁も前に述べられている。自分の旧悪を暴くようで恥ずかしいが、この伏線関係には、今回この小説を読み返してみてもはじめて気づいた。もっとも、『雁』の語り手が全知者であるのに対して、われわれ読者は、言説の線状性に多かれ少なかれ緊縛された立場にあるのだから、それも致し方ないと

言える。ともかく、小説文の作成者は、このような伏線を張りめぐらすことによって、その言説の統合性を高め、自らが繰り広げる世界を秩序立てていく。

最後のテキスト外的理由として「上条」を取り上げよう。この下宿屋における「岡田」の君子ぶりについては、前段ですでに少しく触れた。けれども、より具体的な像が拙論の読者によってイメージされるように、前掲の引用文を含む一段落をここにそっくり記すことにしよう。

容貌はその持主を何人にも推薦する。しかしそればかりでは下宿屋で幅を利かすことは出来ない。そこで性行はどうかと云うと、僕は当時岡田程均衡を保った書生生活をしている男は少かろうと思っていた。学期毎に試験の点数を争って、特待生を狙う勉強家ではない。遣るだけの事をちゃんと遣って、級の中位より下には下らずに進んで来た。遊ぶ時間は極って遊ぶ。夕食後に必ず散歩に出て、十時前には間違なく帰る。日曜日には舟を漕ぎに行くか、そうでないときは遠足をする。競漕前に選手仲間と向島に泊り込んでいるとか、暑中休暇に故郷に帰るとかの外は、壁隣の部屋に主人のいる時刻と、留守になっている時刻とが狂わない。誰でも時計を号砲に合せることを忘れた時には岡田の部屋へ問いに行く。上条の帳場の時計も折々岡田の懐中時計に拠って匡されるのである。周囲の人の心には、久しくこの男の行動を見ていればいる程、あれは信頼すべき男だと云う感じが強くなる。上条のお上さんがお世辞を言わない、破格な金遣いをしない岡田を褒め始めたのは、この信頼に本づいている。それには月々の勘定をきちんとすると云う事実が与って力あるのは、ことわるまでもない。

「岡田さんを御覧なさい」と云う詞が、屢々お上さんの口から出る。

「どうせ僕は岡田君のようなわけには行かないさ」と先を越して云う学生がある。此の如くにして岡田はいつとなく上条の標準的下宿人になったのである。

（6頁11行目～7頁10行目）

下宿屋「上条」の主とも言える「岡田」がそこから発ってしまった。だから、「翌日大学から帰って見ればもう岡田はいなかった」との簡潔な一文は、それがさりげない様相を呈しているだけに、かえってわたしたちに強烈な印象を与

える。それに、単に「上条」の象徴的存在が掻き消すようになくなったというだけではない。「お玉」と「岡田」の淡い恋愛にここで決定的に終止符が打たれるというニュアンスも、この一文からは滲み出ている。「お玉」は昨夏「未蔵」の妾となって「無縁坂」の家に住みついた。九月のある日、折から無聊に苦しんでいた「お玉」は窓外を歩み行く「際立って立派な紅顔の美少年」（87頁5行目）に好意を抱く。そして、ある日、右隣の裁縫の師匠「お貞」から、その「美少年」の消息を聞き込む。

或る日の朝お貞が裏口から、前日にお玉の遣った何やらの礼を言いに来た。暫く立話をしているうちに、お貞が「あなた岡田さんがお近づきですね」と云った。

お玉はまだ岡田という名を知らない。それでいて、お師匠さんの云うのはあの学生さんの事だと云うこと、こう聞かれるのは自分に辞儀をした所を見られたのだと云うこと、この場合では厭でも知った振をしなくてはならぬと云うことなどが、稲妻のように心頭を掠めて過ぎた。そして遲疑した跡をお貞が認め得ぬ程速かに、「ええ」と答えた。

「あんなお立派な方でいて、大層品行が好くてお出なさるのですってね」とお貞が云った。

「あなた好く御存じね」と大胆にお玉が云った。

「上条のお上さんも、大勢学生さん達が下宿していなすっても、あんな方は外にないと云っていますの」こう云って置いて、お貞は帰った。

お玉は自分が褒められたような気がした。そして「上条、岡田」と口の内で繰り返した。

（89頁8行目～90頁5行目）

その後、二人、とくに「お玉」のほうが恋慕の情を募らせていく。しかし、「洋行の事」のために二人の恋は成就しない。だから、「翌日大学から帰って見ればもう岡田はいなかった」の一文は、若い男女のロマンスの芽が摘み取られてしまったことをも宣言している。下宿屋の主がその下宿屋にも自らの恋にも訣別したのだということを簡潔なタッチで表現している。このような多義的にして劇的な一文だということにも、わたしは今回はじめて気づいた。

本節を終える前に、いま一度テキスト内の観点に立って当該の断章を眺めてみよう。というのは、ここには漸層法と多様法も用いられている節があるからである。漸層法には漸減法と漸増法の二種類があり、この両者がともにこの断章に用いられている。前に触れた三項は、字数が次第に少なくなっている。これは、ここに漸減法が用いられていることの証である。けれども、それとはちょうど逆に「岡田」の話を訊きたいという「僕」の気持ちが段々と昂進する。だから、漸増法も同時に用いられていると見なすことができる。そうであるならば、最後の短い一文はクライマックス性を豊かに有していると言える。そして、この短文はわたしたちの胸中で響き渡る。はたして、この文を最後として、「僕」によって書かれた「物語」の実質的内容は尽きてしまう。一方の多様法は、たとえば場所について認められる。「石原の所」「上条」「大学」、そして「岡田の部屋」というふうに、この短い断章のなかで触れられている空間は実に変化に富んでいる。この場合、そこには修辭的の作為があまり感じられない。このような多様性は自然のそれを髣髴とさせるくらいである。この多様法は、対照法や反復法や漸層法といった修辭技法の華ばなしさを緩和して、当該の断章を表面上滑らかにする効果を發揮している。その滑らかさを突き破るようにして、多様法以外の幾多の修辭効果がわたしたちの心を動かす。

*

小説作品を構成する個々の断章は、これまで見てきたように、テキスト内の理由とテキスト外的理由から、わたしたち読者の注意を惹きつけて止まない。そのようなそれぞれの理由は、何らかの修辭技法の基礎のうえに成り立っている。対照法、反復法、比喩、伏線、多義法、漸層法、多様法について、その間の事情を見てきたが、これらにくわえて対句法をも取り上げる必要がある。こうした技巧が単独で、あるいは相まって個々の断章をまとめ上げている。さらには、小説の全体的結構をも決定している。前節では一つの断章に注目するというミクロな視点を取ったが、これから先では『雁』の全体を射程に入れたマクロな接近を、これらの修辭技法について順に試みることにしよう。

*

対照法 (contrast) は、二人の人物や二つの事物を並置して、そのあいだに

際立った相違を創出する技法のことである。拙論のタイトルにある「統合性」と矛盾するように思われるかもしれないが、相互に対照的な二つの存在は、異なっていればいるほど、それぞれの個性が明確になるので、それらは明瞭な一対のものとして把握されやすい。つまり、言説は、このように構造化されることによって、われわれ読者の眼前に統合的なものとして立ち現れてくるのである。ここでは、ポートレートに関する例と持続時間に関する例を一つずつ拾うことにしよう。

「高利貸」を生業とする「末造」は「お玉」を妾として囲う。ある日、妻の「お常」は、自分も横浜土産として「末造」から贈られたのと同じ「蝙蝠傘」を差した女性を、買い物からの帰宅途上で見咎めて、その女が「末造」の囲い者だと直覚する。

「そう。きっとそうなの。まあ、好い気な物ね。ではいつまでも今のよう
にしている積なのね」

「知れた事よ」

「そう。別品とおたふくとに、お揃の蝙蝠を差させて」

「おや。なんだい、それは。お茶番の趣向見たいな事を言っているじゃないか」

「ええ。どうせわたしなんぞは真面目な狂言には出られませんからね」

「狂言より話が少し真面目にして貰いたいなあ。一体その蝙蝠てえのはなんだい」

「分かっているでしょう」

「分かるものか。まるっきり見当が附かねえ」

「そんなら言いましょう。あの、いつか横浜から蝙蝠を買って来たでしょう」

「それがどうした」

「あれはわたしばかりに買って下すったのじゃなかったのね」

「お前ばかりでなくて、誰に買って遣るものかい」

「いいえ。そうじゃないでしょう。あれは無縁坂の女を買った序に、ふいと思いついて、わたしのをも買って来たのでしょう」さっきから蝙蝠の

話はしていても、こう具体的に云うと同時に、お常は悔やしさが込み上げて来るように感ずるのである。

(77頁3行目～78頁2行目)

「別品とおたふくとに、お揃の蝙蝠を差させる」との、やや滑稽な「お常」自身の言葉から、美貌に関する「お玉」と「お常」の霄壤の差が端的に窺える。また、ここ以外にも、「お玉」が美女であり、「お常」が醜女であることは、この小説の随所で触れられている。

他方、この作品には時間に関する文言がかなり多い。巻頭いちばんの段落には、物語が継起した年が明瞭に記されている。

古い話である。僕は偶然それが明治十三年の出来事だと云うことを記憶している。どうして年をはっきり覚えているかと云うと、その頃僕は東京大学の鉄門の真向いにあった、上条と云う下宿屋に、この話の主人公と壁一つ隔てた隣同士になって住んでいたからである。その上条が明治十四年に自火で焼けた時、僕も焼け出された一人であった。その火事のあった前年の出来事だと云うことを、僕は覚えているからである。

(5頁5行目～9行目)

また、妾奉公の話がまとまって、「お玉」が無縁坂に、父親がそこから四五町離れた池の端に転居した月日は、次の断章によって大体が窺い知れる。

両方の引越騒ぎが片附いたのは、七月の中頃でもあったか。ういういしい詞遣や立居振舞が、ひどく気に入ったと見えて、金貸業の方で、あらゆる峻烈な性分を働かせている末造が、お玉に対しては、柔和な手段の限を尽して、毎晩のように無縁坂へ通って来て、お玉の機嫌を取っていた。ここにはちょっと歴史家の好く云う、英雄の半面と云ったような趣がある。

(37頁12行目～16行目)

次に、先にも触れた「蝙蝠傘」のエピソードは、時間に関する文言とともに開始される。

末造夫婦は新に不調和の階級を進める程の衝突をせずに、一月ばかりも暮っていた。つまりその間は末造の詭弁が功を奏していたのである。然るに或る日意外な辺から破綻が生じた。

（68頁10行目～12行目）

あるいは、次のような文言も見出される。

もう一月余り前の事であった。夫が或る日横浜から帰って、みやげに蝙蝠の日傘を買って来た。柄がひどく長くて、張ってある切れが割合に小さい。背の高い西洋の女が手に持っておもちゃにするには好かろうが、ずんぐりむっくりしたお常が持って見ると、極端に言えば、物干竿の尖へおむつを引っ掛けて持ったようである。それでそのまま差さずにしまっておいた。その傘は白地に細かい弁慶縞のような形が、藍で染め出してあった。たしがらやの店にいた女の蝙蝠傘がそれと同じだと云うことを、お常ははっきり認めた。

（70頁10行目～16行目）

この出来事は8月下旬の頃だと推測できる。以上は大学が夏期休暇であった時期の話である。ストーリー展開のうえでは「岡田」はまだ「お玉」と邂逅していない。いよいよ二人の出会いが生起する第「拾陸」章は、次のような一節で始まる。

無縁坂の人通りが繁くなった。九月になって、大学の課程が始まるので、国々へ帰っていた学生が、一時に本郷界限の下宿屋に戻ったのである。

（84頁11行目～12行目）

そして、二人の淡い恋愛が幕を開ける。それが実りそうなところまで行って果ててしまうのは、すでに述べたとおりである。さて、この小説文のクライマックスは「時候が次第に寒くなった」（117頁12行目）頃の日を物語っている。たぶん12月のある日であろう。具体的には118頁14行目から142頁の最終行までである。つまり、24頁もの言説がこの一日のことを詳細に述べているわけである。「お玉」が無縁坂に転居したのは7月の中頃であったのだから、この日までに経過した時間は5か月に及ぶ。ところが、それに充てられている頁数は81頁にすぎない。持続時間のうえでのこの対照は劇的である。コントラストに富んだこの結構に読者が目を瞠り、それを胸に刻むのは言うまでもない。

反復法（repetition）は、この小説文において華ばなしい事例を呈している。それは「岡田」と「お玉」との邂逅に関わる。この出会いが、かなりの頁数を

あいだに置いて、二箇所ですら喚起されている。最初の箇所はこうである。

この話の出来事のあった年の九月頃、岡田は郷里から帰って間もなく、夕食後に例の散歩に出て、加州の御殿の古い建物に、仮に解剖室が置いてあるあたりを過ぎて、ぶらぶら無縁坂を降り掛かると、偶然一人の湯帰りの女がかの為立物師の隣の、寂しい家に這入るのを見た。もう時候がだいぶ秋らしくなって、人が涼みにも出ぬ頃なので、一時人通りの絶えた坂道へ岡田が通り掛かると、丁度今例の寂しい家の格子戸の前まで帰って、戸を明けようとしていた女が、岡田の下駄の音を聞いて、ふいと格子に掛けた手を停めて、振り返って岡田と顔を見合せたのである。

（11頁12行目～12頁2行目）

ここでは、二人の邂逅が主として「岡田」の視点から描き出されている。もう一箇所はこうである。

この時お玉と顔を識り合ったのが岡田であった。お玉のためには岡田も只窓の外を通る学生の一人に過ぎない。しかし際立って立派な紅顔の美少年でありながら、己惚らしい、気障な態度がないのにお玉は気が附いて、何とはなしに懐かしい人柄だと思い初めた。それから毎日窓から外を見ているにも、又あの人を通りはしないかと待つようになった。

（87頁4行目～8行目）

ここでは、二人の出会いが「お玉」の立場から描写されている。この二箇所のあいだには実に75頁もの開きがある。その開きの文章では、主として「お玉」と「未造」のそれまでの「種姓」が述べられている。それは次のような出だしで始まっている。いわゆる「語り手の闖入」の一節である。

窓の女の種姓は、実は岡田を主人公にしなくてはならぬこの話の事件が過去に属してから聞いたのであるが、都合上ここでざっと話すことにする。

（15頁14行目～15行目）

この文言を振り出しに、いわゆるフラッシュバック（flashback）が行われる。ところが、それがこの小説文の実に半分を占めているので、よほど注意しないと、反復法の妙味を見落としてしまいかねない。はたして、ここでの反復法の使用例は『雁』をダイナミックに構造化していて、それを看過すると、この小

説の統合性を享受できなくなる。言い換えれば、この物語の構造が大仕掛けな反復に基づいて成立しているということである。

比喩（trope）は、二人の人物や二つの事物を比較して、その類似性や隣接性に着目する文彩である。象徴性に基づく文彩だと言ってもよい。すでにわたしたちは、頸を垂れた「雁」について、その隠喩（metaphor）としての用いられ方を見た。ここでは換喩（metonymy）の例を一つ挙げよう。

末造は俎橋を渡った。右側に飼鳥を売る店があって、いろいろな鳥の賑やかな囀りが聞える。末造は今でも残っているこの店の前に立ち留まって、檐に高く吊ってある鸚鵡や秦吉了の籠、下に置き並べてある白鳩や朝鮮鳩の籠などを眺めて、それから奥の方に幾段にも積み重ねてある小鳥の籠に目を移した。啼くにも飛び廻るにも、この小さい連中が最も声高で最も活潑であるが、中にも目立って籠の数が多く、賑やかなのは、明るい黄いろな外国種のカナリア共であった。しかし猶好く見ているうちに、沈んだ強い色で小さい体を彩られている紅雀が末造の目を引いた。末造はふいとあれを買って持って往って、お玉に飼わせて置いたら、さぞふさわしかろうと感じた。そこで余り売りがりもしなさそうな様子をしている爺いさんに値を問うて、一つがいの紅雀を買った。[…]

末造は紅雀の籠を提げて俎橋の方へ引き返した。こん度は歩き方が緩やかになって、折々籠を持ち上げては、中の鳥を覗いて見た。[…] 末造は覗いて見る度に、早く無縁坂の家に持って往って、窓の所に吊るして遣りたいと思った。

今川小路を通る時、末造は茶漬屋に寄って午食をした。女中の据えた黒塗の膳の向うに、紅雀の籠を置いて、目に可哀らしい小鳥を見、心に可哀らしいお玉の事を思いつつ、末造は余り御馳走でもない茶漬屋の飯を旨そうに食った。

（94 頁 8 行目～95 頁 14 行目）

ここには、「末造」が「紅雀」について「お玉に飼わせて置いたら、さぞふさわしかろうと感じた」とある。また、「目に可哀らしい小鳥を見、心に可哀らしいお玉の事を思いつつ」ともある。ちょうど国旗や国歌がその国を象徴する

ように、「末造」は「紅雀」を「お玉」の象徴として思い浮かべているわけである。あるいは、両者のあいだに、互いに指呼する関係までもが「末造」の胸に浮かんでいるのかもしれない。いずれにしても、隠喩と同様に、換喩もまた、小説文に登場する二つの存在を緊密に結びつけ、作品の統合性を高めるのに一役買っている。

伏線（foreshadowing）は、ものの辞書によれば「小説や戯曲などで、のちの展開に備えてそれに関連した事柄を前のほうでほのめかしておくこと。また、その事柄」とある。この「ほのめかし」をわたしたちがそう意識するならば、それは単なる因果関係にほかならず、さしたる感興も湧き起こらない。けれども、そう意識しなければ「伏線」の効果が生まれ、振り返ってみて「なるほどそういうことだったのか」と一驚を喫する。ここでは、「お玉」の妾宅の「肘掛窓」を取り上げよう。

しかし二日ばかり立ってから、岡田は又無縁坂の方へ向いて出掛けて、例の格子戸の家の前近く来た時、先きの日の湯歸りの女の事が、突然記憶の底から意識の表面に浮き出したので、その家の方を一寸見た。豎に竹を打ち付けて、横に二段ばかり細く削った木を渡して、それを蔓で巻いた肘掛窓がある。その窓の障子が一尺ばかり明いていて、卵の殻を伏せた万年青の鉢が見えている。こんな事を、幾分かの注意を払って見たために、歩調が少し緩くなって、家の真ん前に来掛かるまでに、数秒時間の余裕を生じた。

そして丁度真ん前に来た時に、意外にも万年青の鉢の上の、今まで鼠色の闇に鎖されていた背景から、白い顔が浮き出した。しかもその顔が岡田を見て微笑んでいるのである。

（12頁10行目～13頁3行目）

さりげなくストーリー上に現れた「肘掛窓」であるが、その存在が物語の展開に深く関わってくるようになる。はたして、前掲の引用のほとんど直後には、次のような段落が見出される。

通る度に顔を合せて、その間々にはこんな事を思っているうちに、岡田は次第に「窓の女」に親しくなって、二週間も立った頃であったか、或

る夕方方の窓の前を通る時、無意識に帽を脱いで礼をした。その時微白い女の顔がさっと赤く染まって、寂しい微笑の顔が華やかな笑顔になった。それからは岡田は極まって窓の女に礼をして通る。

（13頁16行目～14頁4行目）

いわば「肘掛窓」は美男と美女のあいだを取り持つ空隙のように機能する。そして、ストーリー展開のうえでは前掲の引用文と同時日のことに言及する、次のような段落も見出される。ここでは視点が前掲文とは逆に「お玉」のほうに移っている。

岡田が始て帽子を取って会釈した時、お玉は胸を躍らせて、自分で自分の顔の赤くなるのを感じた。女は直覚が鋭い。お玉には岡田の帽子を取ったのが発作的行為で、故意にしたのでないことが明白に知れていた。そこで窓の格子を隔てた覚束ない不言の交際が爰に新しい *époque* に入ったのを、この上もなく嬉しく思って、幾度も繰り返しては、その時の岡田の様子を想像に画いて見るのであった。

（87頁13行目～88頁1行目）

ところが、この「肘掛窓」をめぐる樁事が起きる。「末造」が買ってきて窓に吊るしてあった籠のなかの例の紅雀を、大きな青大将が襲ったのである。そこにちょうど通りかかった「岡田」は出刃包丁で蛇を退治する。こうした経緯のさなかで「岡田」と「お玉」ははじめて言葉を交わす。そして、これを契機に「お玉」の「岡田」に対する思慕が前にも増して募りゆく。見られるように「肘掛窓」という小道具が果たす役割は重要である。その重要性を、わたしたち読者は以上のような諸言説を読み切ってはじめて理解する。伏線の伏線たる所以である。

多義法 (polysemy) は、語句や文に複数の意味を込める文彩である。そうすることで、描写の対象が厚みを持つようになる。たとえば、次の断章での「不しあわせな雁もあるものだ」との「岡田」の独語の裏には、「不しあわせな女もあるものだ」という含意が込められている。

僕は岡田と一しょに花園町の端を横切って、東照宮の石段の方へ往った。二人の間には暫く詞が絶えている。「不しあわせな雁もあるものだ」と、

岡田が独言の様に云う。僕の写象には、何の論理的連繋もなく、無縁坂の女が浮ぶ。「僕は只雁のいる所を狙って投げたのだからなあ」と、今度は僕に対して岡田が云う。「うん」と云いつつも、僕は矢張女の事を思っている。「でも石原があれを取りに往くのが見たいよ」と、僕が暫く立ってから云う。こん度は岡田が「うん」と云って、何やら考えつつ歩いている。多分雁が気になっているのであろう。

（134頁4行目～10行目）

この断章のなかの「僕の写象には、何の論理的連繋もなく、無縁坂の女が浮ぶ」との一文も、岡田の脳裡で、「雁」という字面の裏に「女」がイメージされていることを証拠立てている。ここでは「僕」はまだ「岡田」の「洋行の事」を知らないでいる。「岡田」は翌日にも「上条」を後にする。ついでには彼と「お玉」の淡い恋愛も終焉を迎える。こうしたことをその瞬間において知らないでいるにも関わらず、「僕」は「岡田」の言に悲恋の匂いを嗅ぎつけたのである。また、「僕は只雁のいる所を狙って投げたのだからなあ」との「岡田」の言葉の裏にも、「岡田」と「無縁坂の女」との邂逅の偶発性、帽子を取って会釈するようになった経緯の偶然性が意味されている。さらに、「無縁坂の女」は、文字どおり「岡田」とは「無縁」の關係に逢着する運命にあったわけであり、ここには地名とストーリー展開との重なり合いが見て取れる。

漸層法（gradation）は、情感を次第に高めていったり、紙幅を次第に大きくしていったりする修辞技法である。この場合をわたしは漸増法（crescendo）と呼んでいる。これに対して、それらを段階的に少なくしていく技法も他方にはあって、わたしはそれを漸減法（decrescendo）と呼んでいる。いずれにしても、それらの技法は、文章を秩序立てて統合する役目を担う。『雁』における漸減法は、たとえば「末造」の職業を知ったときの「お玉」の狼狽に関して、その適用例が認められる。

一体お玉の持っている悔やしいと云う概念には、世を怨み人を恨む意味が甚だ薄い。強いて何物をか怨む意味があるとすると、それは我身の運命を怨むのだとでも云おうか。自分が何の悪い事もしていぬのに、余所から迫害を受けなくてはならぬようになる。それを苦痛として感ずる。悔や

しいとはこの苦痛を斥すのである。自分が人に騙されて棄てられたと思った時、お玉は始て悔やしいと云った。それからたったこの間妾と云うものにならなくてはならぬ事になった時、又悔やしいを繰り返した。今はそれが只妾と云うだけでなく、人の嫌う高利貸の妾でさえあったと知って、きのうきょう「時間」の歯で咬まれて角が刃れ、「あきらめ」の水で洗われて色の褪めた「悔やしさ」が、再びはっきりした輪廓、強い色彩をして、お玉の心の目に現われた。お玉が胸に鬱結している物の本体は、強いて条理を立てて見れば先ずこんな物でもあろうか。

（46頁15行目～47頁9行目）

ところが、この引用文のほとんど直後にはこうある。「お玉」が「あきらめ」の心境へと滑らかに移行することを描いた段落である。

お玉はこの時もう余程落ち着いていた。あきらめはこの女の最も多く経験している心的作用で、かれの精神はこの方角へなら、油をさした機関のように、滑かに働く習慣になっている。

（47頁15行目～48頁1行目）

さらには、次のような段落もある。場面は、自分が「高利貸」の妾となっている苦しい胸のうちを優しい父親にも打ち明けられないまま、「お玉」が父の許を辞した直後である。

たよりに思う父親に、苦しい胸を訴えて、一しよに不幸を歎く積で這入った門を、我ながら不思議な程、元気好くお玉は出た。折角安心している父親に、余計な苦勞を掛けたくない、それよりは自分を強く、丈夫に見せて遣りたいと、努力して話をしているうちに、これまで自分の胸の中に眠っていた或る物が醒覚したような、これまで人にたよっていた自分が、思い掛けず独立したような気になって、お玉は不忍の池の畔を、晴やかな顔をして歩いている。

（60頁11行目～16行目）

漸増法にしろ、いま取り上げた漸減法にしろ、それらを成立させる項の数は三つで事足りる。上記で引用文を三つだけ挙げたのも、そのことを例証する目的があったからだ。いずれにしても、ここでの漸減法は、心中の動揺から胸中の

平穏へと段階的に移りゆく「お玉」の心境に密着して用いられている。「お玉」に感情移入をしているわたしたち読者も、ほっと安堵の胸をなでおろす。

次に漸増法については、言うまでもなく、「お玉」の「岡田」に寄せる思慕が募りゆく過程に、その華ばなしい適用例を見出せる。ここでも三段階に分けて事の成り行きを辿ることにしよう。

まだ名前も知らず、どこに住まっている人か知らぬうちに、度々顔を見合やすので、お玉はいつか自然に親しい心持になった。そしてふと自分の方から笑い掛けたが、それは気の弛んだ、抑制作用の麻痺した刹那の出来事で、おとなしい質のお玉にはこちらから恋をし掛けようと、はっきり意識して、故意にそんな事をする心はなかった。

岡田が始めて帽子を取って会釈した時、お玉は胸を躍らせて、自分で自分の顔の赤くなるのを感じた。女は直覚が鋭い。お玉には岡田の帽子を取ったのが発作的行為で、故意にしたのでないことが明白に知れていた。そこで窓の格子を隔てた覚束ない不言の交際が爰に新しい époque に入ったのを、この上もなく嬉しく思って、幾度も繰り返しては、その時の岡田の様子を想像に描いて見るのであった。

（87 頁 9 行目～88 頁 1 行目）

ここには、三段階の過程の最初の二つの段階が描かれている。第一段階では単に視線を交わすだけの間柄であった。ところが、ある日「岡田が始めて帽子を取って会釈した」ので、「お玉」は大いに晴れやかな気持ちになる。しかし、二人の関係が「不言の交際」であることに変わりはない。二人がただ一度だけ言葉を交わすのは、例の「蛇退治」の際である。その場面での「お玉」の最初の言葉は次のようである。

「お隣へお為事のお稽古に来ていらっしゃる皆さんが、すぐに大勢でいらっしゃって下すったのですが、どうも女の手ではどうする事も出来ませんでございます」

（100 頁 12 行目～14 行目）

ようやくにして、二羽の紅雀のうちの一羽を銜えた蛇を退治した「岡田」は、そのまま「お玉」の家を辞す。

「先ず僕の為事はこの位でおしまいでしょうね」と云って、岡田は戸口を出た。

女主人は「どうもまことに」と、さも詞に窮したように云って、跡から附いて出た。

岡田は小僧に声を掛けた。「小僧さん。御苦勞序にその蛇を棄ててくれないか」

「ええ。坂下のどぶの深い処へ棄てましょう。どこかに縄は無いかなあ」
こう云って小僧はあたりを見廻した。

「縄はあるから上げますよ。それにちょっと待っていて下さいな」女主人は女中に何か言い附けている。

その際に岡田は「さようなら」と云って、跡を見ずに坂を降りた。

（106頁5行目～12行目）

ここの引用箇所には「詞に窮する」との表現がある。実は、この小説の最後に至るまで、「岡田」に会っても「お玉」は言葉に窮してばかりいる。恋慕の情があまりにも篤いと、理性の働く余地がなくなるからだろう。はたして、「末造の自由になっていて、目を瞑って岡田の事を思うようになった」（113頁14行目）ほどに、「お玉」は「岡田」への恋の炎に身を焦がすようになる。以上のように三段階のプロセスを明確に意識することは、物語の展開を高所から掴み取るうえで有効である。また、語り手はそうした漸増法を的確に駆使しているのだとも言える。この間の事情は『雁』の言説を構造化し、それをまとめ上げている。

多様法（variation）は、自然なものの変化変容を擬する技法である。上掲の「飼鳥を売る店」の情景描写は事物の多様性を描いていた。鮮やかな感覚描写なので、拙論の読者諸氏も覚えておられることだろう。事物の多様性以外にも、心理面のそれももちろん存在する。次の引用箇所は、「岡田」に「蛇退治」をしてもらった「お玉」が、礼をどのようにしたらいいかを迷う一段落である。

お玉は小鳥を助けて貰ったのを縁に、どうにかして岡田に近寄りたいたいと思った。最初に考えたのは、何か品物を梅に持たせて礼に遣ろうかと云う事である。さて品物は何にしようか、藤村の田舎饅頭でも買って遣ろうか。

それでは余り智慧が無さ過ぎる。世間並の事、誰でもしそうな事になってしまふ。そんならと云って、小切れで肘衝でも縫って上げたら、岡田さんにはおぼこ娘の恋のようで可笑しいと思われよう。どうも好い思附きが無い。さて品物は何か工夫が附いたとして、それをつい梅に持たせて遣ったものだろうか。名刺はこないだ仲町で拵えさせたのがあるが、それを添えただけでは、物足らない。ちょっと一筆書いて遣りたい。さあ困った。学校は尋常科が済むと下がってしまって、それからは手習をする暇も無かったので、自分には満足な手紙は書けない。無論あの御殿奉公をしたと云うお隣のお師匠さんに頼めばわけは無い。しかしそれは厭だ。手紙には何も人に言われぬような事を書く積りではないが、とにかく岡田さんに手紙を遣ると云うことを、誰にも知らせたくない。まあ、どうしたものだろう。

（108頁15行目～109頁11行目）

「飼鳥を売る店」の情景にしても、ここでの「お玉」の遅疑逡巡にしても、ストーリーの持続時間とナレーションのそのあいだには、かなりのギャップがある。つまり、物語上の時間が長いのに対して、それを喚起する語りの時間は短い。それにも関わらず、多様性のよく効いたこうした箇所を読むわれわれは、文章の詳細さに心を惹かれる。これは一つの芸術的錯覚にほかならない。文体上の作為と言ってもよい。前後の文脈から浮き出て、緩やかになった語りのテンポは、このようにしてしばしば物事や心理を克明に描き出す。このような断章は文脈のなかで截然と聳え立つ。この間の事情は、対照法のメカニズムとよく似ている。その他の文脈と際立ったコントラストをなすことによって、かえって相互に引き立て合う効果が生まれる。因みに、拙論の冒頭近くに掲げた断章での多様法は、それを構成する要素が言説のなかに散在していた。そのため、ここに見られるようなコントラストは見出せなかった。

最後に、対句法（parallelism）は、「晴耕雨読」という四字熟語において端的に見られるように、前半と後半の字句どうしが対になっている整然たるケースについて言われる。小説文ではこれほどまでに整然とした構成は、少なくともマクロな視点からは認められないが、対応する人物や事物に対義性が存在するときには、同類の感興がわれわれ読者の胸中に生まれることがある。ここで

は細かな例と大規模な例を一つずつ拾うことにしよう。前者の例としては、「お常」の女中が名前を「松」と言い、「お玉」の女中が「梅」という名であることが挙げられる。語り手の単なる言葉遊びのようにも思われるかもしれないが、両者のあいだには気質のうえでの大きな違いもある。「松」に関しては次のような言及がなされている。

末造の家の空気は次第に沈んだ、重くろしい方へ傾いて来た。お常は折折只ぼうっとして空を見ていて、何事も手に附かぬことがある。[…] 女中が飯の菜を何にしようかと問うても、返事をしなかったり、「お前の好いようにおし」と云ったりする。[…] 下女はお上さんがあんなでは困ると、口小言を言いながら、下手の乗っている馬がなまけて道草を食うように、物事を投遣にして、鼠入らずの中で肴が腐ったり、野菜が干物になったりする。

（79頁11行目～80頁5行目）

これに対して「梅」は、まだ小娘であって未熟な点は否めないが、よく働く主人思いの女中である。たとえば、次のような一節を挙げることができよう。

朝目を醒まして起きずにはいられなかったお玉も、この頃は梅が、「けさは流しに氷が張っています、も少しお休になっていらっしゃいまし」なぞと云うと、つい布団にくるまっている様になった。

（118頁7行目～9行目）

大規模な対句法の例としては、そこには推測も混じっているが、「お玉」の諦念が取り上げられる。まず、自分を妾として困った男の職業が「高利貸」だと知った「お玉」は驚愕するが、その驚きも「あきらめ」へと変わっていく。

お玉はこの時もう余程落ち着いていた。あきらめはこの女の最も多く経験している心的作用で、かれの精神はこの方角へなら、油をさした機関のように、滑かに働く習慣になっている。

（47頁15行目～48頁1行目）

それでは「岡田」への恋慕が実らなかつたときの「お玉」も、やはり「あきらめ」の境地へと「滑かに」移行したのであろうか。語り手は、このことには詳しく触れないでいる。単に「岡田とお玉とは永遠に相見ることを得ずにし

まった。そればかりでは無い。しかしそれより以上の事は雁という物語の範囲外にある」（143頁8行目～9行目）と述べるに止めている。けれども、懊悩するお玉は、例の「お貞」から「岡田」の洋行を伝え聞いて、やっと「あきらめ」に身を委ねたのかもしれない。とにかく懊悩の度合は、「高利貸」の妾に自分になったと知ったときのそれよりも、数段高かったに違いない。「美しく睨った目の底には、無限の残惜しさが含まれているようであった」（141頁16行目～142頁1行目）とあるからである。そして、この「無限」という言葉が強烈だからである。いずれにしても、ある禍がヒロインの胸中で「あきらめ」の念に変わっていくという点では、自分が「高利貸」の妾だと知ったときと「岡田」に対する悲恋に落胆するときとは共通している。

*

拙論を通して、マクロ的にのみ検討した対句法を除けば、対照法をはじめとする七つの統合要素について、ミクロな視点とマクロな視点から『雁』の言説に迫ることを試みた。この小説がいかに秩序立てられ、統合されているか、ひいては一つの想像的世界がどのように構築されているかを明らかにすることが多少なりともできたと、わたしは自負している。

それら八つの統合要素は、いずれもがレトリックで言う文彩である。それらは言説の骨組であって、いわゆる内容ではない。だからこそ、『雁』以外の小説においても認められるはずの特徴だとも言える。単に一作を俎上に載せたにすぎないけれども、そこに認められた八つの統合要素は、あらゆる小説作品を成り立たせているもののように思われる。

このような要素が存在することを頭の片隅で意識しながら小説を「消費」すれば、それから得られる楽しみも多くなるだろう。あるいはまた、小説を「鑑賞」したいという向きにとっても、それらは有益な手がかりとなるはずだ。さらにまた、小説に関心のない人たちにあっては、拙論を通して、小説の基礎的条件とはいかなるものなのかを掴んでもらえたならば幸甚である。

主要参考文献

—Bourneuf (Roland) et Ouellet (Réal): *L'univers du roman*, PUF, 1975.

小説文の統合性（吉田）

- Fontanier (Pierre): *Les figures du discours*, Flammarion, 1977.
- Genette (Gérard): *Figures III*, Seuil, 1972.
- Stalloni (Yves): *Dictionnaire du roman*, Armand Colin, 2006.
- 野内良三『レトリック辞典』、国書刊行会、1998年。
- 野内良三『レトリックと認識』、日本放送出版協会、2000年。
- 吉田廣「二つの『石榴』——日仏詩文の比較対照的分析の一例——」、大阪
経済法科大学論集第55号、1994年。
- 吉田廣『「女の一生」を読み解く——フランス小説の徹底分析——』、大阪
経済法科大学出版部、2008年。